

たぶん かきようせいしやかい すいしんじぎようほうこくしよ
多文化共 生社会づくり推進事業報告書

1 ^{いたくぎようむめい がいよう} 委託業務名・概要

(1) ^{ぎようむめい} 業務名

^{ちい きしやかい いちいん} 地域社会の一員として ^{かつやく} 活躍しよう ― ^て ひがしうらで手をつなごう ―

(2) ^{がいよう} 概要 (事業の要約・事業の目的など)

^{ほんじぎよう なんべいにつけいじん} 本事業は、南米日系人を始めとする ^{がいこくじん} 外国人が ^{たすう きよじゆう} 多数居住している ^{ひがしうらちよういしはま} 東浦町石浜地区において、^{いしはまにししやうがつかう きよてん} 石浜西小学校を拠点として ^{うんえい} フェスティバルを運営することを ^{つうじ} 通じて、^{にほんじん} 日本人、^{がいこくじん} 外国人にとって ^{たのしみ} 楽しみながら ^{ちいき} 地域の ^{たぶん かきようせい} 多文化共 生の ^{いしき} 意識づくりを ^{じようせい} 醸成することを ^{もくてき} 目的とした。

^{とくしよく} 特色としては、^{がつかう きよてん} 学校を拠点にすることで、^{じどう} 児童だけでなくその ^{ほごしや} 保護者を ^{まきこむ} 巻き込むことも ^{かのう} 可能となり、なかなか ^{ちいきしやかい} 地域社会に参加する ^{さんか} きっかけがない ^{せいじん} 成人が ^{きがるにさんか} 気軽に参加できるようにしたことや ^{ひがしうらちゆうがつかう} 東浦中学校や ^{ひがしうらこうこう} 東浦高校と ^{れんけい} 連携することで ^{じどうせいとおよび} 児童生徒及びその ^{ほごしや} 保護者に ^{こども} 子どもの ^{きよういく} 教育について ^{かんがえるきかい} 考える機会を ^{ていきよう} 提供したことである。

2 ^{じつしじぎよう} 実施事業について

(1) ^{じつしじき} 実施時期 ^{へいせい} 平成19年 ^{ねん} 7月 ^{がつ} 1日 (日) ～平成20年 ^{ねん} 1月25日 (金)

^{かいさいび} フェスティバル開催日：^{へいせい} 平成19年 ^{ねん} 9月 ^{がつ} 29日 (土)

(2) ^{じつしちいき} 実施地域 ^{ひがしうらちよういしはま} 東浦町石浜地区及びその ^{しゆうへんちいき} 周辺地域

(3) ^{じぎよう} 事業の ^{ぐたいてきないう} 具体的内容

「^が フレンドシップディ ^{にち} イン ^{つち} いしはま」の ^{じつし} 9月29日 (土) 実施に向けて以下 ^{むけ} の ^{いか} 取り組み ^{とりくみ} を ^{おこなつ} 行った。

- ① ^{じつし} 実施の ^{けいかく} 計画・^{じゆんび} 準備・^{うんえい} 運営のための ^{じつこういいん} 実行委員 (ボランティア) を ^{ちいきじゆうみん} 地域住民・^{ほごしやとう} 保護者等に ^{ぼしゆう} 募集し、^{いらい} 依頼した。

^{めい} 32名が ^{じつこういいん} 実行委員として ^{とうろく} 登録し、うち ^{めい} 5名は ^{がいこくせき} 外国籍 ^{ほう} の方であった。

- ② ^{かいさいび} 開催日まで次の ^{つぎ} 10回、^{かい} 東浦住 ^{ひがしうらじゆうたくしゆうかいじよう} 宅集 会 場で ^{じつし} 実施している ^{なつやすみがくしゆうかい} 夏休み学 習 会 や ^{いしはまにししやうがつかう} 石浜西小 学 校 ^{がつかう} 学 校 ^{ぎようじとう} 行事等 ^{じつこういいんかい} のあとに ^{かいさい} 実行委員会 ^{かい} を ^{やく} 開催した。1回あたり約1 ^{じかんていど} 時間程度。

開催した期日

7/6(金)	7/23(月)	7/27(金)	8/27(月)	8/28(火)
8/29(水)	8/30(木)	9/11(火)	9/28(金)	10/27(土)

- ③ フレンドシップディに向けた学習指導及び練習会を石浜西小学校の教室や東浦住宅集会所を利用して、8月から9月にかけて、それぞれの発表やコーナー別に開催していた。

自主的に外国に関する研究や、ダンスなどをフェスティバルに向けて、地域の住民による指導により、日本人、外国人の子どもたちが準備や練習に励んだ。この練習を通じて、子ども同士も普段の学校にはない交流を持つことができ、外国人と日本人が一緒になって遊ぶ光景も以前に増している。学習指導や練習を通じた多文化共生の社会づくりの狙いがうまくいったと考えている。

また、小・中・高の多世代の交流により、小学生は自分の将来を描く具体像が、中・高校生は、年長者としての責任感が醸成された。こうした多世代の交流は、今後の地域の形成にあたって大変重要なつながりになる。

さらに、指導者である大人も指導を通じて他の文化に触れ、考え方のちがいを実感したとのことである。また、外国人の指導者は、今回、日本人とのかかわりが持てたことにより、今後地域で行う活動に参加する際、積極的に参加できそうだと感想を得ている。

開催した期日：8月～9月にかけて各コーナーや発表別に5回～10回程度開催。(発表者約300人がコーナーや発表イベント毎に分かれて自主的に開催している。)

- ④ フレンドシップディ 当日の内容 (発表した児童数)

第1部 発表会を楽しもう(8:40～) 石浜西小学校体育館

【石浜西小学校児童等による発表】

- ・低学年「日本の童歌」発表(87名)
- ・中学年「スペインのカスタネット」発表(91名)
- ・高学年「八木節とファンクソーラン」

「世界の民族衣装ファッションショー」(あわせて93名)

【地区ボランティア等の発表】

- ・刈谷市ピタゴラス校のダンス発表(18名)
- ・サンバチームの発表(23名)
- ・カポエイラチームの発表(10名)

第2部 体験コーナーを楽しもう(10:00～) 石浜西小学校

全11コーナー(数字はボランティア数)

- ・東浦中学校、東浦高校を知ろうコーナー(生徒・教員等10名)
- ・何でも情報コーナー ブラジル籍の人が知りたいこと(3名)
- ・各国紹介メインコーナー(10名)
- ・バザーコーナー(10名)
- ・各国の遊び紹介コーナー(3名)
- ・ダンスを踊ろうコーナー(3名)
- ・世界びっくり味覚コーナー(3名)
- ・各国への旅コーナー(3名)
- ・茶席コーナー ブラジルのコーヒー(5名)
- ・地震防災、人権に関するコーナー(10名)
- ・綿菓子、ポップコーンコーナー(県営団地自治会役員参加7名)

第3部 和太鼓等を楽しもう(11:40～) 石浜西小学校体育館

- ・和太鼓「楽人」の演奏(50名)
- ・石浜西小学校吹奏楽とバトンのドリル演奏
- ・児童全員のキッズソーラン

3 実施結果(実施の効果等、数値を入れるなど具体的に)

- (1) 大規模なフェスティバルのため、「グループいしはま」のメンバーだけではとても運営できないため、町内会の回覧板や公民館の掲示板などを利用して、当日の運営を一緒になって行ってくれる実行委員のボランティアを募集した。

これにより運営の円滑化だけでなく、ボランティアによる社会参画のきっかけづくりをねらった。募集に対して32名の参加があったことから、地域の中で既に多文化共生に対して理解ある人があり、実行に移す人たちが多くいることがわかった。また、今後は、こうしたキーパーソンを中心として多文化共生を広げていくことが可能になった。

また、事前準備・計画のための実行委員会は、参加者の活発な意見交換や様々な提案がなされたことから、当初5回の予定の所を10回も開催された。

イベントの成功に向けて実行委員による活発な意見が交わされたことで、多文化共生に対する思いを語り合う場ともなり、地域の意識づくりに大いに役だった。

- (2) あいにくの雨天にもかかわらず、本イベント各催事参加者は439名であり、見学に訪れたその家族等は200名を超える。また、祭りを見学に来た一般参観者は正確な数を把握することはできなかったが、知りうる範囲でも100名を超えていることから、本イベントの参加者は最低でも700名を超えている。この地域の多文化共生に対する関心の高さを知ることができた。

なお、この数字は、県営住宅に在住する人たちの4人に1人になることから、地域全体のお祭りの第一歩として成功したといえる。

- (3) このフェスティバルに向けて、8月から9月にかけて児童生徒が自発的に自ら担当するコーナーの企画を考え、準備を行った。外国人、日本人の児童が一緒になって自らの文化、友達の文化を学び、形にする作業を通じてお互いを良く知ることができるようになった。

この作業はコーナー事(全11)に様々に行われており、少ないもので5回、多いもので10回程度の学習会、練習会が行われていた。児童達は、自ら考え、学ぶ体験を得ることができ、子ども達自身からも「楽しい」との感想をたくさん得ている。

この経験をきっかけとして、石浜西小学校の全児童が、外国の文化等を調べる学習を継続している。こうした子どもたちが成長することで、この地域の交流がより盛んになることが期待される。

- (4) 東浦中学校、東浦高校の現役生徒の協力を得た学校紹介コーナーでは、外国人児童の合格体験記を日本語・ポルトガル語併記で紹介することで、外国人児童や保護者に小学校卒業後の進路についての具体的なイメージを提供することができた。

外国籍の中学生・高校生が意欲的に詳しく学校紹介や進路説明をしている姿が日本人の住民に対しても印象的であったとの感想を得た。

- (5) 参加した地区の住民からは「この地区で初めて多文化共生のイベントが実施されたことがうれしい。外国人のことをもっと理解していきたい。」「ブラジルから2年前に家族で来た。きちんと生活ができるかとても不安だった。このイベントに来てとてもうれしく思った。」「自国チリの国旗が体育館に掲示してあ

った。ブラジル人ばかりで小学校にチリは一人だけだ。しかし、チリ国旗があった。とても感動した。うれしかった。」等の感想を得ることができた。

なにより、東浦住宅の自治会役員の方達が自発的にフェスティバルのわたあめなどのコーナーを手伝うことを申し出てくださったことが、印象的であった。今後、この地域における多文化共生を考える上で重要な事だと考えている。

4 事業の特質（工夫した点などを事例を挙げて具体的に）

- (1) 小学生をみると、他の国の文化や慣習が理解できず相手の言動を不快に感じてしまう場面もある。このことは団地の成人の世界でも日常的にあると聞く。そこで、お互いをよく理解し合うことが大切であることを念頭に、異文化理解を主としてイベントを構成・工夫した。「グループいしはま」の構成員や実行委員の中には外国人の方も含まれている。この外国人の方は地域でもリーダー的な存在であり、多文化共生を常に考え、このイベントの特質を十分に伝えてくれた。また、「日本と外国のちがい」を考えるコーナーも設置した。子どもたちが考えた様々なちがいを掲示し、それに対する意見等も書いてもらった。

こうした工夫もあって、イベント終了後、石浜西小学校の児童は、イベント実施前に比べ、総合学習(国際理解)に意欲的に取り組んでおり、外国に興味を示すことが多くなってきた。

- (2) 地域の住民を対象に実行委員ボランティアを募集する際に1回、また、地区への広報活動の手段として3回、公民館の回覧板や県営団地の回覧板・掲示板を利用する等、地域を巻き込んだイベントづくりとなるよう工夫をした。今回のフェスティバルによって、地域の多文化共生に関する意識を向上させるきっかけづくりができた。

バザー用品の回収にも回覧板を利用することで効果的に回収することができた上、バザーの周知につながり参加者や来訪者を増やすことにつながった。回覧板は、地域の全家庭の住民に読まれるため、多くの地域の方がバザー用品を学校へ届けてくださったり、当日参加して下さったりした。このバザーの売上金約3万円は子どもたちのためにサッカーボールを購入した。

また、小学校にはペルー籍の児童も3名在籍していることから、小学校の児童の発案で6月にあったペルー地震の募金活動も行った。この募金活動では約1万5千円を集めることができ、日本赤十字社へ送金することができた。外国人・日本人のこの地域の児童にとって、社会貢献活動を身をもって経験する、またとない機会となった。

5 今後の課題

(1) 石浜地区で初めての多文化共生に関するイベントができ、地域の多文化共生に関する意識の向上に大変役だった。こうした意識啓発は、繰り返し行っていくことが最も重要である。今後も、最低でも年に一度は同種のイベントを継続的に実施していくことが必要であると考えている。また、地域の住民からも今回のイベントをきっかけに継続を望む声が大変多い。

しかしながら、継続のためには経費が必要であり、行政との連携も模索しているところであるが、具体的な話にまでは至っていない。本イベントに対する寄付を募る方法や、出店による収益確保なども今後検討していきたい。

(2) 2008年は、「日本ブラジル交流年」である。日本人ブラジル移住百周年記念として両国でその行事が開催される。本地区は外国籍の殆どがブラジルである。日伯交流活動に今後力を注ぎたい。

6 その他参考事項

平成19年9月28日 本イベントが、「中日新聞 知多版」で紹介された。

平成19年10月8日 本イベントが、「県政ニュース」でテレビ放映された。